

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2012

課題番号：20720079

研究課題名（和文） 19 世紀アメリカ東海岸におけるユニテリアニズムを中心とした宗教と性差の研究

研究課題名（英文） Unitarianism and Women Writers in the 19th century New England

研究代表者

大串 尚代（OGUSHI HISAYO）

慶應義塾大学・文学部・准教授

研究者番号：70327683

研究成果の概要（和文）：

本研究期間において、アメリカ独立革命後にひとつの国家としての道を模索していた 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけておこった「ユニテリアン論争」を出発点とし、自由キリスト教といわれるユニテリアニズムおよびトランセンデンタリズムへと続く思潮史と女性作家の宗教観の変遷を研究した。反カルヴィニズムからスピリチュアリズムへの流れと、第一派フェミニズム運動との関連性を見出し、女性作家の文学作品における表象について考察を行った。

研究成果の概要（英文）：

During the reporting period, project activities focused on the history of religious consciousness in New England shortly after the American Revolution. Considering the influence of Unitarian Controversy, transcendentalism and anti-Calvinism on women writers in the late 18th and 19th century, this research project clarifies that the liberal imagination and spiritualism were important impetus for women writers in the era of the first wave of feminism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ニューイングランド 女性 スピリチュアリズム 宗教観 ユニテリアニズム

1. 研究開始当初の背景

アメリカにおける植民地時代から 19 世紀にかけての宗教的背景については、David Hall、Mark A. Noll、David S. Reynolds、難波雅紀、増井志津代らなどの先行研究があった。また個々の 19 世紀アメリカ女性作家がもつアンチ・カルヴィニズム的側面については、Nina Baym、Susan Harris、Mary Kelley

らなどによる女性文学の研究でなされてきた。しかしながら、これまではトランセンデンタリズムとの関わりから論じられてきた女性と宗教の問題について、ユニテリアニズムを含めて考える必要があるという考えにいたったのは、19 世紀初頭におこった女性歴史家ハナ・アダムズと男性牧師ジェディディア・モースの論争についての資料 *An Appeal*

to the Public (by Jedidiah Morse, 1814) および *A Narrative of the Controversy between the Rev. Jedidiah Morse and the Author* (by Hannah Adams, 1814) を 2004 年から 2005 年にかけての在外研究中に米国ブラウン大学図書館にて見つけたことに端を発する。

19 世紀初頭に始まった、ハーバード大学を中心としたユニテリアニズムと、イェール大学を本拠地としたカルヴィニズムの闘いは、女性対男性の対立になっている点において、その後のアメリカ東海岸の女性の宗教的立場を示唆するものになっている。にもかかわらず、ユニテリアニズムとジェンダーの関係は、文学の立場からは論じられることが少なく、ハナ・アダムズに関する論文については、アメリカにおいても Michael Everton, Sherry Schwartzs および Gary Schmidt らによる歴史学からのアプローチがほとんどであり、それらは女性文学でのアダムズの位置づけを行っていたとは言い難い。一方女性文学研究では、これまで文学の男性中心的・家父長的側面の強い戒律の遵守を重視するカルヴィニズムからの脱却について、ハナ・アダムズについての言及はなされてこなかった。しかし、アダムズを 19 世紀アメリカ女性作家の起点とすることで、19 世紀に活躍したチャイルドやセジウィックらが、所感宣言を経て、南北戦争後のオルコットやスーザン・アンソニー、そしてスタントンの *The Women s Bible* へと繋がる女性文学史が可能となる。

2 . 研究の目的

本研究は、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけておこった「ユニテリアン論争」を足がかりに、自由キリスト教といわれるユニテリアニズムからトランセンデンタリズムへと移行する時代の女性作家の宗教観の変遷を研究することを目的とする。

(1)ハナ・アダムズとジェディディア・モースによる 1805 年に始まる歴史教科書論争と、ジェディディア・モースとウィリアム・エマソンらハーバード出身者によるユニテリアン論争の関係

(2)ユニテリアニズムおよびトランセンデンタリズムにおけるヨーロッパとの関係

(3)1820 年代に始まるキャサリン・マリア・セジウィックのユニテリアン・トラクトへの執筆と、反カルヴィニズム的態度

(4)1848 年に発表されたエリザベス・ケイディ・スタントンによる女性の独立宣言とよばれる「所感宣言」および 1892 年にスタントンが出版した女性の観点から聖書を読み直

した『女性の聖書』(*The Women s Bible*)における宗教的背景

(5)1850 年代に出版されたりディア・マリア・チャイルドの宗教史と懐疑主義思想およびアン・ハチンソン再評価について

(6)日本におけるユニテリアニズムについて福澤諭吉を中心とするもの。

3 . 研究の方法

本研究は、文学研究と歴史研究のふたつの側面を併せ持っており、扱う時代は 18 世紀後半から 19 世紀末までを予定している。基本的に本研究は資料調査に頼らざるを得ないが、4 年間の研究期間で、一年ごとに調査すべき対象を決め、集中的に研究することで、資料収集および資料整理・資料分析の効率化をはかった。

(1)一年目はユニテリアニズムおよびトランセンデンタリズムにおけるヨーロッパとの関係および 1820 年代に始まるキャサリン・マリア・セジウィックのユニテリアン・トラクトへの執筆と、反カルヴィニズム的態度を重点的に調査する。主に 1800 年～1820 年代を中心に扱う。

(2)二年目は、エリザベス・ケイディ・スタントンが 1848 年に発表した「所感宣言」および 1892 年に出版した *The Women s Bible* を中心に、女性解放運動と宗教における女性の位置にどのような相関関係があったかを重点的に考察する。扱う期間は「所感宣言」が出された 1848 年から南北戦争が終わる 1865 年までと、女性参政権協会が設立される 1876 年から普通参政権が憲法修正条項により認められる 1920 年を対象とする。

(3)三年目は、リディア・マリア・チャイルドの短編小説 “Hilda Silverling” を中心に 19 世紀半ばの懐疑主義とのスピリチュアリズムとの関連性を考察する。また、反カルヴィニズム小説に見られるアン・ハチンソンの再評価について調査・分析を行う。年代としては、1840 年代から 1850 年代を扱う。

(4)最終年は研究期間の最後の年にあたるため、これまでの成果を集大成し、過去 3 年の間に行ってきた研究を有機的に統合させ、研究書として出版可能な状態に仕上げる。

4 . 研究成果

ユニテリアン論争に端を発する女性作家の位置付けと宗教・信仰の問題について、18 世紀から 19 世紀にかけての見取り図が見えてきたことが本研究の成果である。個別には

以下の通りである。

(1)19世紀半ばの女性作家らの作品に多くみられるリベラル・イマジネーション文学は、ユニテリアニズムを基礎とした上で、さらにそこからスピリチュアリズムという方向性を見出している。これはハナ・アダムズから始まり、キャサリン・マリア・セジウィック、リディア・マリア・チャイルド、エリザベス・バックミンスター・リーを経て、19世紀後半のエリザベス・ケイディ・スタントンへと繋がっていく。

(2)ユニテリアニズムから19世紀女性文学史を概観する文学史については、海外でもまだ研究の余地があるところであり、とくにエリザベス・バックミンスター・リーやチャイルドの短編“Hilda Silfverling”など、これまであまり顧みられなかった作家や作品について独自の解釈をほどこしたことにより、日本国内外におけるアメリカ女性作家研究に貢献できたと思われる。2000年前後より、スピリチュアリズムという視座からアメリカ女性文学を見直す批評的動向が散見されているが、主に1840年代あたりから論じられていることが多く、ユニテリアン論争からリベラル・イマジネーションを用いた作品を経てスピリチュアリズムへとつなぐ可能性を提示できたことは意義があることと思われる。

(3)本研究期間では、予定していた日本におけるユニテリアニズムの影響について十分に研究をおこなうことができなかつた。とくに福澤諭吉とユニテリアニズムの関係については、まだ研究の余地があると思われるため、今後の課題としたいと考えている。ユニテリアニズムに関するイギリスからの影響、とくに、ジョゼフ・プリーストリーをはじめとする18世紀末イギリス知識人からの影響関係を今後の研究課題とし、トランスアトランティック、トランスパシフィックな視座にたつ研究を引き続きおこなっていく所存である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

(1) 大串尚代「森と川の記憶 ソローとチャイルドにおけるインディアン表象」『ヘンリー・ソロー研究論集』査読有 第36号 2010年 31-40頁

(2) Hisayo Ogushi “A Stolen Story: Hannah

Adams and the Unitarian Controversy”
Poetica 査読有 第77号 2012年
105-27頁

(3) 大串尚代「子どもの作り方…『女の子の本』と『トム・ソーヤーの冒険』にける愛の規律」『マーク・トウェイン研究と批評』査読無 第12号 2013年 28-35頁

[学会発表](計7件)

(1) 大串尚代「森と川と記憶 ソローとチャイルドのインディアン表象」日本ソロー学会2009年度全国大会 2009年10月9日 立正大学

(2) 大串尚代「彼女は・・・すべきだった」のか? Joyce Carol Oates, *Rape: A Love Story*を読む」成蹊大学アジア太平洋研究センター(CAPS)プロジェクト「アメリカと暴力」2010年3月15日 成蹊大学

(3) 大串尚代「雪のごとき冷たき人 チャイルドの短篇に見る子殺し・冷凍睡眠・インセスト」日本英文学会第83回大会 2011年5月21日 北九州市立大学

(4) 大串尚代「帰還する者たち…Lydia Maria Childの*Philothea*における再生譚」津田塾大学アメリカ文学女性像研究会 2011年12月17日 津田塾大学

(5) 大串尚代「こどもの作り方 チャイルドの『女の子の本』と『トム・ソーヤーの冒険』」日本マーク・トウェイン協会 2012年10月12日 中京大学

(6) 大串尚代「もうひとりの女性異端者の物語…エライザ・バックミンスター・リーにみる19世紀アン・ハチンソン再評価」日本アメリカ文学会東京支部 2012年12月8日 慶應義塾大学三田キャンパス

(7) Hisayo Ogushi “In a Sleep as Cold as Ice: Time Travel and a Transatlantic Technology in Lydia Maria Child’s Hilda Silfverling”
Transatlantic Women II 2013年6月7日 OPA Centro Arte e Cultura イタリア(フィレンツェ)

[図書](計2件)

(1) (共著)佐藤道生編 慶應義塾大学文学部『註釈書の古今東西』2011年 14-26頁

(2) (共著)権田建二・下河辺美知子編著 彩

流社 『アメリカン・ヴァイオレンス…
見える暴力・見えない暴力』2013年
93-120頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大串 尚代 (OGUSHI HISAYO)

慶應義塾大学・文学部・准教授

研究者番号：70327683